



## 親面接による思春期登校拒否の援助—子どもの自我成長と家族の新生—

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/1127">http://hdl.handle.net/10258/1127</a>

# 親面接による思春期登校拒否の援助

— 子どもの自我成長と家族の新生 —

清水 信 介

## On a Therapeutic Help to a School Refusal in Adolescence by Parent Counseling

Nobusuke Shimizu

### Abstract

In general, it is difficult to establish the therapeutic relationship in the case of school refusal in adolescence. Therapists often encounter cases in which it is necessary to find out appropriate approaches to overcome this difficulty.

In this paper, the author presents the school refusal case of a high school boy which was treated successfully by parent counseling alone. Since he refused to come to a therapist, the author tried to help him by parent counseling. Forty-four sessions for his mother, six sessions for his father and two conjoint counseling sessions were held during fifteen months. And this approach not only promoted the growth of his ego, but also caused the remarkable change of their family dynamics.

### I はじめに

わが国で登校拒否の問題が注目されるようになってから四半世紀が過ぎた。この間、登校拒否は昭和30年代に急激に増加し、その後横ばい状態にあったが、昭和50年代に入ってから再び増加の傾向を示している<sup>12)</sup>。また、かつては幼稚園児や小学校低学年の登校（登園）拒否が多かったが、近年高年齢化の傾向がみられ、中学生、高校生の登校拒否の占める割合が増えている。しかも、それらの思春期登校拒否の中には治療の難しいケースも少なくない。登校拒否は今や量的にも質的にも広がりを見せており、児童期、青年期の深刻な適応問題の1つとなっている。

登校拒否の心理臨床では、一般に、本人に対してカウンセリング、遊戯療法、箱庭療法、内観療法、行動療法などが行われたり、あるいはそれらと併行して親面接が行われたりすることが多い。また、最近では、全体としての家族を治療単位として家族力動、家族システムを変化させることにより問題解決をはかろうとする家族療法が試みられるようにもなっている。筆者が登校拒否の相談治療にあたる場合、子どもの心理療法と併行親面接を行うことが最も多いが、ケースが備えている条件によっては親子同席面接や家族絵画療法（石川 1983）<sup>3)</sup>などを援用した家族療法的な接近を試みたりもしている。また、中学生、高校生の登校拒否では本人が来談しない場合も多いが、そうしたケースでは親面接のみで取り組んでいる。しかし、いずれの接近法をとる場

合でも、治療の主眼を子どもの自我の成長を促進することに置き、またそのために必要な親や家族の理解と協力関係を育み、親の養育態度や家族関係の変化をはかっていく工夫を念頭においている。

ここに報告するのは男子高校生の登校拒否事例である。このケースでは、登校拒否に悩む本人が来談しないため親のカウンセリングだけを行ったが、子どもの問題解決と共に家族関係の大きな変化が生じ、家族療法的な効果が認められた。以下では、その治療経過を報告し、不登校発生の背景、親面接の過程と治療者の役割、不登校を契機に生じた家族力動の変化などについて考察する。

## II 事例概要

〔症例〕 花形球郎<sup>たまお</sup>（仮名） 男子 高校1年 15歳 （インテーク時）

〔主訴〕 登校拒否

〔家族構成〕 父親42歳、母親40歳、姉17歳（高校3年）、妹11歳（小学6年）、父方祖母75歳と本人との6人家族。父親は、6人きょうだい中4番目の長男である。彼の父親が40代で脳卒中で倒れ働けなくなったので、中学を卒業後洗濯屋の職人となる。21歳で自分の店をもち、24歳の時に結婚したが、結婚後10年間は彼の父が商売上なした負債を背負っての生活であった。父親は、母親の表現を借りると、「親離れ、きょうだい離れが出来ていない人」である。自分が手をつけたことでも、途中でますぐると、その後後末について人に頼ることがよくある。また、家族以外の人に対してははっきり物を言えない性格である。父親と祖母との結びつきは極めて緊密で、彼は祖母に逆らったことがない。彼は、妻に対しては、自分の思うようにならないと暴力をふるうことがあるが、子どもに対しては自分が子ども時代に叩かれた経験がないので叩いたりすることは好まない。

母親は8人きょうだいの一番上であるが、他のきょうだいは皆腹違いであり、母となった人が4人もいたという複雑な家庭に育つ。実母は、彼女が生まれてすぐに姑との関係が悪くて出奔したらしい。彼女は幼時から悲しみや寂しさなどを抑えて頑張ってきたものと推察される。結婚後は、勝気でしっかり者の妻として働いてきた。資金繰り、客への対応などの対外的なことは母親がほとんどやっている。しかし、そのようにしっかりやることがますます父親を彼女に頼らせることにもなっていたようである。

球郎の姉はおとなしくあまり社交性のある方ではないが、妹は活発な性格の子のようである。

祖母は社交性の乏しい人で、自分の娘たちの家へ遊びに行っても気持が落ち着かずすぐ帰って来るといふ。外出することが少なくテレビを見たりして過ごすことが多い。家庭内では、食事づくり一切をやっており、息子夫婦や孫のことなどによく口を出す。

〔生育歴・現病歴〕 出産時異常なく母乳で育つ。姉が父親や祖母になつかず母親だけについ

たので、母親は姉を3歳位までよく背負っていた。そのため、球郎の方は1歳位からよちよち歩きで母親について歩いていったという。当時、母親は、商売が忙しいこと、濃密な夫と姑の関係や同居する夫の弟妹のことなどに気を遣い余裕がなく、球郎や姉には早く大きくなって欲しいと思って厳しく育てた。球郎は「聞き分けが良く手のかからない子」であり、第一反抗期はなかった。やんちゃをしたり喧嘩をしたりすることもない。友だちに仲間外れにされても黙って見ているほうであった。彼は小さい時からあまり親に甘えなかった。小学校にあがるまで指しゃぶりがあり、中学校頃まで眠っている時にチュッチュッと口を吸うことがよくあった。

小学校時代を通して学業成績は上位で運動も得意の方であった。教師からはいつも「真面目で申し分のない子」と評された。2年生の時に父親が少年野球のチームをつくり、球郎もそれに入り5、6年生に混じってやっていた。中学校では野球部に入り、1年生の時から副キャプテンであった。3年間野球をやり、四番バッターで皆のアイドル的存在であった。

球郎は高校になるまで親に反抗したことがなく、親から見ても叱るような面がなかった。むしろ、あまりに几帳面できちんとし過ぎているので、母親の方が気を遣って疲れるくらいであったという。

公立のP高校を受験して合格。その際、彼は「P高校は勉強が大変だから、野球はやらないかな」と語っていた。しかし、野球部の監督でもある担任教師に誘われ入部することになった。入学後しばらくして、球郎は「いくら寝てもだるい、眠い」と訴え出した。5月初めから、ご飯が食べられないと言い痩せ始めた。5月19日に野球部の試合があったが、彼はレギュラーにはなれなかった。21日には定期試験があった。そして、22日の朝、球郎は蒲団にくるまったまま起きて来ず、登校しなかった。父母には「勉強について行けなくなった」と訴える。父親は、このまま休むと長く続くのではないかという不安もあって、球郎を数回叩くが、相変わらず蒲団の中に止まっていた。翌日も同じことを口にし、以後黙り込み、蒲団にくるまってずっと寝ている。以後不登校が続き、P高校の教頭から筆者を紹介され、父母来談となる。

〔治療期間〕本人が来談しないため、親のカウンセリングを1年3ヵ月間にわたって行った。父親が終盤に至るまで面接に対して消極的であったので、母親面接が中心となり、母親面接44回、父親面接6回、父母同席面接2回であった。なお、球郎は親面接を始めてから10ヵ月後に登校を開始している。

### Ⅲ 治療過程

ここでは、1年3ヵ月間にわたる父母カウンセリングの過程を7つの時期に分けて報告する。

第1期 動揺する父母、ふさぎこむ球郎（1ヵ月間 インテーク～母親面接3、父親面接1）

〔インテーク面接〕（6月3日）

父母揃って来談する。現病歴、生育歴などの粗筋を聴く。母親が主に語る。父親は治療者が水

を向けると少しだけ口を開く。今日来談することは本人には話していないと言う。そこで、球郎に来談する意志があるかどうかを聞いてもらうことにする。もし、本人が来ない場合には、次回は母親と面接をすることも約束する。また、この時点での治療者の見立て、理解を伝える。父親は試験の準備が出来ないまま臨んで駄目だと思って怠けているのではないかと言う。治療者は、単なる怠けや甘えということではないこと、今は登校を強要せずに見守ることが大切である旨説明する。

〔母親面接 1〕 (6月9日)

球郎はその後も登校せず、父親が焦るので、母親は切羽詰った様子である。昨日自分は1日中泣いていたと語る。前回の翌日母親が球郎に治療者のところへ行かないかと誘ってみたが、「今へ行かない」との返事だった。3日前、球郎は調子が良く、2階の自室から下りて来て夕食を食べた。その時、彼は洗濯屋をやると言った。それに対して、母親は「それは良いけれど、その前にやることがある。中学卒と同じではやっていけない」と答えた。母親から球郎の話聞いて、父親は「もし働くというのなら、余所へ行って修業しろ。家にいるということは学校へ行くことだ」と怒り、母親に「そう言え!」と言ったという。父母共に「登校するか、さもなくば………」と二者択一で態度決定を迫り、待つということが出来ない感じである。父親が自分で直接かわらないで母親に「そう言え!」と命じたことを治療者が取り上げると、母親は父親のあり方について語る。祖母も言っているのだが、父親はこれまであまり自分で苦労したことがなく、周りが世話するという形で来ている。父親は球郎のことで心の余裕がなく、限界だと言っているという。

〔母親面接 2〕 (6月16日)

4日程前から球郎は食事を日に一度位しかとらなくなり寝てばかりいる。夜眠れないと訴える。妹が兄への心遣いをしてアイスクリームを持って行った時、球郎は蒲団の中で泣いていたという。昨夜父親がいらいらして「1ヵ月も休んだのだから、そろそろ結論を出せ!」と怒鳴ったが、息子は黙ったままであった。父親は結論をと迫るが、登校することだけしか念頭にない。父親はやはり球郎が怠けていると考えたりもしている。母親は、父親に同調してみたり、待つことが必要だと思直したり、揺れている感じである。治療者は球郎がひとりで泣いていたり食事をとれなかったりしていることに母親の注意を向け、彼が登校出来ないで苦しんでいることを説く。母親はそれを理解するものの、焦る気持が強い。

5月末に球郎のことをM精神科に相談に行ったことがある。その時は内科医を紹介されただけであった。先日M医師に電話して球郎の状態を話したところ、明後日自宅まで診に来てくれることになったが、その辺りのことをまだ本人に話していないという。治療者は、無用な混乱を避けるために事前にその辺をきちんとしておいた方がよいと伝える。また、M医師の往診後に治療者から手紙を出し球郎に働きかけてみることにした。

〔母親面接 3〕 (6月23日)

16日の夜、父親が外で飲酒して帰り、球郎を殴り、彼を殺して自分も死ぬと言いだ騒ぎになった。その際球郎は何も抵抗しなかった。その夜遅く、彼は「ママ、俺学校へ行く」と言い、明け方まで起きていた。母親がのぞくと、球郎は蒲団にくるまって泣いていた。しかし、その日は登校出来なかった。翌日、M医師が往診し、抗うつ剤を処方してくれた。

21日に治療者からの手紙が届いた。球郎は手紙を読んだが、機嫌は悪くなかった。ところが、その翌日にあったことで元の状態に戻ってしまったという。実は21日に担任が家庭訪問し、明日遠足だから来ないかと言って帰った。翌日、父親は球郎を登校させようとして朝早く起こした。母親、祖母、姉は無理に学校へ連れて行くことに懸念を示したが、父親はこのタイミングを逃さないと強硬であった。しかし、父親の車で学校のすぐ側まで行った時に、彼が「嫌だ」と言うので泣き出したので、そのまま戻って来た。そういう経験を通して、やっと父母は球郎が怠けているのではないことを納得したという。母親は球郎の状態についてかなり理解出来るようになり、治療者への信頼も出て来た感じである。父親の人柄について、母親は「パパに球郎の立場になれというのは無理だと思う。人の立場になって感じる事の出来ない人で、私もそれで苦しんできた」と不満を述べる。治療者には、父親自身どうして良いのかわからず困って、球郎を叱ったり機嫌をとったりしているように思われた。父親を支える必要性を感じたので、父親との面接を提案した。また、球郎を支える目的で再度手紙を書くことにした。

〔父親面接 1〕 (6月26日)

学校へ連れて行った際の球郎の状態を見て、この子は病気なんだなと思った。それ以後は登校を迫るようなことはしていない。ただ、仕事をしていても息子のことが頭から離れず疲れると涙を流して語る。治療者は、父母や家族が大変なことはよく分かるが、本人も大変であること、周りが焦らずに対処していくことが大切であることを説明する。

第2期 母親落ち着きを取り戻し息子の問題について考え始める (2ヵ月間 母親面接4～母親面接11)

〔母親面接 4〕 (6月30日)

今回、母親は比較的落ち着いた感じで語る。球郎は昼間床の中で雑誌を見たりしているという。母親は、不登校が始まる直前の彼の状態や強迫的な性格について語る。5月の始め頃から、球郎はスケジュールに追われている感じであり、勉強が大変だと言っていた。その頃から、目がひっこみ痩せてきていた。球郎は小さい頃からきちんとしていないと気がすまない性質である。例えば、蒲団のシーツをきちんと敷かないと気がすまず、母親に手伝わせてシワのないように直すことがよくある。授業のノートは、どの科目についても、一度別の紙に書いてきて、それを自宅で清書してノートを作るという。治療者が、そうした性格傾向が強い場合、やらなきゃいけないことが増えて来ると行きづまることがあると言うと、母親は今回のことはそうだと思っていると答える。

〔母親面接 5〕 (7月7日)

一昨日担任が家庭訪問。野球部の背番号を返す件と出席日数のことで来た。球郎の部屋で2人で話していたが、帰る時に、担任は球郎が来週月曜日から登校すると約束したと父母に話した。背番号を返すことは息子にとって辛かったと思う。父親にしても球郎がリーグ戦のメンバーに入れなかったことがショックだと思う。父親と球郎とが息子の部屋で泣いていた。そのことについて、母親は「これまでパパは大きいことに出会うと逃げていたが、息子のところへ行って泣いていたというのは変わってきたと思う。これまでの状態だと、私がいろんなこと背負っている感じだから、これからは、私も婆ちゃんもパパの代弁をしないでなるべく見守っていようと、婆ちゃんと話し合った。私のこれまでのやり方がパパを私に頼らせるようにしてしまったと反省している。徐々に、徐々に手をひいていくようにしようと思っていたが、パパの方はそれに慣れていないから」と語る。

〔母親面接 6〕 (7月14日)

球郎は月曜、火曜と2日間登校したが、水曜日から行けないでいる。水曜日の朝は、父親が家校の側まで連れて行ったが、やはり駄目で戻ってきた。その日はそのまま午前中寝たきりで1日食事をせず、翌日の昼過ぎまで何も食べなかった。父親は世間体を気にして再び焦り、球郎への働きかけもせつづく感じになってきているという。

〔母親面接 7〕 (7月21日)

先日2日間登校しておちこんで以来球郎に全然変化なく、何を聞いても黙りこくっている。父親はいらいらしており、球郎のことについて諦めたような口ぶりを見せるところもあるが、内心はどう考えているのか母親にも分からない。この回、治療者は父親と面接したい旨伝える。しかし、3日後に母親から電話があり、父親は「自分が行っても変わらないし、お前が行くだけで良いのではないか」と言って、来談する意志がないという。

この回の後、治療者は球郎をいくらかでもサポートすることが出来ればと思って、彼に手紙を出している。

〔母親面接 8〕 (7月28日)

先週まで球郎は家族を避けている感じであったが、夏休みに入ってから、朝早く起き普段着に着替えている。母親に話しかけてきたり笑ったりもする。昼食、夕食はとっている。M医師からの薬が切れたが、本人は要らないと言っている。今日母親が出かけて来る時、猫が迷い込んで来て、きょうだい3人でそれをかまっていた。

母親は、球郎がどうして登校拒否になったのかを考え始めている。治療者は、それに関連して球郎の幼少時のことなどを聞き、話し合う。球郎は全くお利口で手がかからずきた。考えてみると、私は球郎の絵や字の書き方、口のきき方などに口を出すことが多かったと思うと語る。

2日前、同級の子が印刷物を届けに来たが、本人に渡して良いものかどうか判断がつかず、

治療者の意見を聞いてからと思っただけで渡してないと言う。治療者は渡して構わない旨答え、外の現実を伝えて良いが、それに関係していろいろ要求したりはしないようにと伝える。また、担任から休学するかどうかについて近いうちに話し合いたいとの連絡があったという。治療者は、そのことを事前に球郎にも伝え彼の意向を聞いたり休学の意味などについて話し合っておいた方が良く説明する。

〔母親面接 9〕 (8月8日)

球郎はひとところよりも元気になり、新聞を取りに店の方にも出て来ることがある。退屈を訴え、母親の勧めたプラモデルづくりを一生懸命やっている。この間迷い込んだ猫が球郎になつき、本人も良く世話をしている。休学の話はまだ本人にはしていない。印刷物もまだ渡していない。今球郎の状態が良いので、印刷物を渡してプレッシャーがかかったらと思って、父母としてはためらう。休学のことにしてもどう話したら良いのかと迷っていると言う。母親が休学をどのように理解しているのかと思って聞いてみると、少し誤解しており罪悪感を抱いている。治療者は休学について一般的な説明をする。さらに、そのことについて担任と連絡をとり、学校側の考えをよく把握した上で、球郎と話し合っただけの方が良く指示する。

〔母親面接 10〕 (8月18日)

前回面接から帰ってすぐ学校側の考えを確かめたら、病気扱いで休学することになると言われた。学校と休学についての話合いをすることを球郎に話し、印刷物も渡した。球郎は3日前繁華街へ映画を見に出かけ、デパートで買物して帰ってきた。この頃、球郎は以前よりも意志表示をするようになった。

父親は息子のことについて諦めたと言い、休学してもしょうがないとか母親が面接に通ってもしょうがないと言っているという。

〔母親面接 11〕 (8月25日)

担任から休学は欠席日数の枠ぎりぎりの時点まで待つとの連絡があった。母親は、「この頃、球郎についてこれまで思ってきたとは違うふうに見えるようになった。あの子は器用だと思ってきたが、この頃は逆に無器用なのではないかと思うようになった。球郎はひとつのことに執着しものごとを好い加減に出来ない面もある。余裕がないというか、柔軟に対応出来ないところがあったのではないかと思う」と語る。

この回、治療者はこれまでの話合いの過程で気になっていたことについて控え目に取り上げていく。それは、家族が何かにつけて本人の気持を確かめずに「球郎だったらこう思うだろう」と推量し判断してしまうことであつた。周りが推測し判断することによって、球郎の本当の気持がわからなくなったり外の現実が彼に伝わらなかつたりするのは好ましくないことについて話し合う。そこから、さらに、母親が先回りして処理することや手助けし過ぎることが話題にのぼる。母親は自分の行動にそういう面が多かつたことに気づいてきているが、なかなか直らないと語る。



第3期 休学の手続き。球郎は治療的退行を示し、新たな動きを見せ始める (約1ヵ月半  
母親面接12～母親面接18)

〔母親面接 12〕 (9月5日)

この頃球郎はイラストを描いている。夜家の外に出てバットの素振りをしたり鉄壘鈴をいじったりもしている。3日前に担任と副担任が来た。球郎は休学に同意したが、教師が帰った後椅子を投げたりしていた。担任たちと話している際、彼は蒲団を押入れにしまわず、立て膝のままであぐらをかいて待っていた。人前で良い子ちゃんであった球郎がそうした態度を示すのは母親には意外であった。以前の球郎のイメージからすると意外に思うことが最近いくつか目につくが、そういうことの方が普通なのかなと思ったという。

〔母親面接 13〕 (9月22日)

球郎はその後もプラモデルづくりなどで過ごしている。最近体重が増えて、学校に行っていた頃と比べると4kg程肥ったので、本人は喜んでいる。現在の身長180cm、体重64kgである。

〔母親面接 14〕 (9月29日)

このところの球郎の行動にはこれまでには見られなかった面がある。母親が彼に仕事を頼んでも真剣にやらずルーズになった。また、結構自分の言いたいことを言い、ある面では逆らうようなところも出てきている。

さらに、母親は球郎の不登校の発生に関係するのではないかと思うことについて語る。球郎は少年野球ではキャプテンをやり、中学の野球部では皆のアイドル、花形であった。ところが、P高校では、他の中学から来たA君が入学決定と同時に先輩に呼ばれて練習に参加したのに、先輩がいない球郎は呼ばれなかった。そういう面での変動が強く影響しているのではないかと思うと。

〔母親面接 15〕 (10月6日)

この頃球郎は昼頃まで寝ている。すごくルーズになってきて、入浴後風呂場の消灯をしなかったりする。最近父親が気づいたことであるが、球郎は寝ている時に乳を吸うような感じで口をチュチュいわせていることがある。

〔母親面接 16〕 (10月13日)

姉も妹も球郎がこの頃変わってきたと言っている。母親の言うことに素直に従わないようなことが見られる。息子がこういうことになって思うのだけれど、自分は子どものことをあまりに気づき過ぎるのだろうかと思はれる。

〔母親面接 17〕 (10月20日)

先日夜9時頃、父親、姉、球郎の3人で外へ食事に行ったので母親はびっくりしたという。その際、彼は、肥ってきて自分の着る物がないので、姉の赤いトレーナーを借りて着て行った。球郎のトレーナーを新調することにしたが、彼は以前は赤い物など着ることが全くなかったのに赤い色のものを希望した。

〔母親面接 18〕 (10月27日)

球郎は昼夜逆転の生活になってきて、夜中に漫画を読んだりしている。3週間位前から夜食を欲しがるようになった。

昔から球郎は意志表示することに慎重で、周りの仲間が大勢を示してから自分の意志を明らかにする方であった。それは単なる慎重さだけでなく、周りに気を遣って自分を出せなかったのだと思うと母親は語る。球郎は父親に対して話し辛い感じをもっていたと思う。野球のものを除くと、父親との接触は少なかった。父親は物を買って与えたりすることは細々とやるが、子どもとの接し方がわからないところもある。父親は人との話し方、接し方がうまく出来ない。結婚当初、母親は夫を冷たい人だと思ったという。相手の気持を考えずにズカズカ入って来る感じで傷つけられた。

第4期 家の中の修理をする父親，“おふくろ”になりたいと言う母親 (約3ヵ月間 母親面接19～母親面接25, 父親面接2)

〔母親面接 19〕 (11月10日)

この頃球郎は気に入らないことがあるとふくれる。先日、球郎は櫛をどこへ置いたかわからないと言って捜して「僕、この頃何かピントが狂ったみたいだ」と言った。自分でもたがが外れてきたように感じているのではないかと思う。顔を洗わないでご飯を食べるようなことも出てきたので、「ああ、普通になってきたな」と思った。

父親がこの頃少し変わってきて、家の中のことをいじるようになった。風呂を直したり煙筒掃除をしたりする。これまで父親がそういうことをしないので、母親は「ああ、パパは出来ないんだな」と思って自分でやったり他人に頼んだりしていたという。

この回母親はつぎのようにも語る。「以前知人から貰った本の中に“おふくろ”というのは家族の容れ物だと書いてあった。何でも黙って包んでやれるような容れ物であると。でも、私は今まで主人の代りに頑張ることをやってきて、“おふくろ”ではなかった。また、私は自分の気持を主人に言えず、よりかかるところがなかった。だから、早く“おふくろ”になりたいと思う。今までは、自分の2倍も3倍もの力を出してきた」

〔母親面接 20〕 (12月1日)

球郎は頻繁に外出し本屋などへ行っている。最近球郎は「うちではお母さんがご飯をつくらない」と文句を言い、食べ物のことなどで訴えてくることが多い。母親が要求に応じてちらし寿司をつくと、「こんなの初めて」と言って喜んだという。母親は彼の食べ物に関しての要求を甘えの欲求として理解して、妹にも「お兄ちゃんは小さい時に甘えてこなかったの、今甘えてあげるのだからね」と話したりもしている。また、母親は、これまで球郎に物を買って与える時に不満、注文が多いので気むずかしい好みの煩い子だと思ってきたが、彼がそこで示そうとしていたことを親が分からないできたのではないかと思うと語る。父親は玩具などを彼が欲しがる前に片っ

端から買い与えたりしたが、親が気むずかしいと見ていた彼の反応は、自分の望まない物を与えられることへの一つの自己主張でもあったのかもしれない。また、煩く注文をつけることで甘えようとしていたのかもしれない。そういった意味を分らないで、ただ球郎を気むずかしい煩い子とだけ見ていたと語る。治療者は母親の鋭い洞察に感心して話を聴く。

〔母親面接 21〕 (12月8日)

姉も時間的に忙しいのに嫌がらないで球郎の言うことに応えてやっている。家族みんなが球郎のことで協力してくれる。この回、母親は自分の中学時代の家庭における悩みや葛藤について語る。そして、自分が結婚以来頑張ってやってこれたのは、自分の父親が良いお母さんばかり与えてくれたからだと思っている。今は、自分が育った家庭が複雑だったことにむしろ感謝していると言う。治療者は母親のそうした受けとめ方、感じ方に感動する。

〔母親面接 22〕 (12月15日)

昨日球郎が「ママはしなくても良いことをすることがあるからな」と言ってきた。でも、ああいうのが普通の反応ではないかと思う。球郎が父親とあまり話をしないのが母親には不思議であるという。2人共無器用というか、話の中に冗談を入れたりすることが出来ない。本音のところでは話し合う感じが無い。

〔母親面接 23〕 (12月22日)

球郎は自分で洗濯したりする。以前よりも喜怒哀楽をはっきりと表わすようになった。祖母はものごとが自分の思うようでない気が済まない方である。父親は若い頃からおとなしく祖母にもものを言わなかったが、この頃は少し強くなってきた。

〔母親面接 24〕 (1月12日)

年が明けたが、母親は球郎が4月からも学校へ行けないのではないかという気持が強いようで、父親に「球郎は今冬眠中だから、まだ学校へ行けないわ」と話したりしていると言う。治療者は、いつ頃までに学校に対して態度表明をしなければならないのかを予め把握しておくことは必要であるが、今から学校へ行けないと決めてかからないで見守っていこうと話す。

〔母親面接 25〕 (1月19日)

球郎はこれまでのように読書したり絵を描いたりせず、自分の身の回りのことをやり出した。また、祖母や母親に注意されたりすると、黙っておらず二つ三つ口を返してくる。しかし、父親は子どもを叱ったり悪い役回りをしない方だから、球郎が父親に口を返すこともない。この後、父親の子どもへのかかわり方が話題になる。治療者が受けた印象では、父親は球郎のことを心配しているのだが、直接かかわらず球郎の回りをグルグル回っているだけという感じである。面接終了時、父親と面談したい旨伝えてもらうことにする。

〔父親面接 2〕 (1月26日)

父親は治療者から言われたので来ただけという感じで、自分の方から話を出してくるというこ

とはない。母親に委せているという態度である。治療者は、父親との話合いの時間をもつこと自体に意味を求め、父親の積極的なかわりを強く要求するような働きかけは控えた。父親は球郎が4月から登校するかどうか分からないと言う。治療者はそれを受け容れ、とにかく焦らないで球郎の歩みを見守っていきましょうと伝える。また、学校側の意向などの外的現実をきちんと把握して本人に伝えた方が良くも説明する。

第5期 いくつかの現実直面——共時性（2ヵ月間 母親面接26～母親面接32, 父母同席面接2）

〔母親面接 26〕（2月2日）

数日前にあった担任からの連絡によって母親はかなり動揺した様子である。担任から「もし他の高校を受けるのなら願書の締切りが1月30日なので……」との電話があった。その言葉によって母親は相当混乱したようだ。母親が「もし復学する場合はどうしたら良いのでしょうか」と聞くと、「登校拒否はなかなか時間がかかるとし、意志表示は今すぐでなくても良いですよ」との返事であった。担任としては念のためとての連絡であったらしいが、母親は学校に見放されたように感じてショックを受けた。

母親は、「休学を続けるか、復学するかといったことについて球郎には話せない。そういう話をするとう球郎が苦しむかと思うと、私もパパも言えない」と言う。治療者は、登校を迫ることは控えた方が良いが、休学や復学について意志表示せねばならない時期などを本人に知らせることは必要だと説く。母親は、それは理屈では分かるが出来ないと言う。そして、「球郎がどうして学校へ行けないのかということについて全く理解出来ない。全く理解出来ない！どうしても理解出来ない。クラスの人も悪くないし、先生も良くしてくれるし、普通には理解出来ない！」と泣きながら語る。これまで母親が球郎の問題をかなり理解していると思っていたので、治療者は驚き話し合う。「どうして学校へ行けないのか全く理解出来ない……」というのは、今の状況で自分がどうしたら良いのか分からないという不安や焦りを語っているように受け取れた。治療者が母親のその辺りの気持を受けとめ明確化していくと、母親は大分落ち着いてくる。父親は球郎のことについて「俺は知らない。もう面倒臭い。どうでも良い」と言っている由。前回の父親面接にも不承不承で出かけて来たのだという。

〔母親面接 27〕（2月9日）

前回面接から帰って休学、復学のことなどを球郎に話したら、球郎は復学すると答えた。彼は「前から4月から行こうと思っていた」と言ったが、その後極端に不機嫌になったという。治療者は、復学すると言ったとしても同時に現実を目の前にして不安に思ったりもしていると思うので、球郎のそうした気持を汲んで彼と一緒に歩調で歩く感じで見守ってあげることが大切だと伝える。母親もその必要性に同意する。実は、球郎が復学すると言った日の夜、父親は喜んで下の娘を連れて焼き鳥屋に行った。そして、途中で電話をかけてきて、球郎を電話口に呼んでくれと

言った。すると、球郎は不機嫌になったという。

その翌日、球郎が可愛がっている例の猫が自宅の庭先で他の猫と喧嘩をした。店先にいた母親はそれを止めないで徹底してやらせてみた。猫は血だらけになって戦った。2階にいた球郎が下りて来て、「止めなかったから、こんなになるんだ」と母親を怒った。母親は内心「自分だって聞こえていた癖に、ママばかり頼って」と思ったが、黙っていた。その夜、球郎は猫の頭をなせながら「お前カッコ良くなったな」と話しかけていたという。この話を聞いて、治療者は、まるで球郎の分身が戦ったかのように感じた。母親もその時似た感じを抱いていたらしく、「一度喧嘩するだけした方が怖いものや何かが本当に分かるからと思って見守っていた」と言う。この1週間、母親も球郎も猫も現実と対決することをやったように治療者には感じられた。

復学すると言った日以来、球郎はあれ食べたいこれ食べたいとは言わなくなり、自分ひとりできちんと食べたりもしている。

〔母親面接 28〕 (2月16日)

復学すると言ってから1週間位は不機嫌だったが、この頃は元に戻ってきた。猫にさかりがついて外へ出たがるが、子どもたちは猫を外に出すことに反対している。しかし、猫は無理矢理脱走して、その度に他の猫にやられている。

〔父母同席面接 2〕 (2月21日)

父親は不承不承で来たのか、あまり話さず、面接中足をかいたり視線をあらぬ方向にやったりして身が入らない。4月に向けての家族の心構えや対応の仕方、学校との連絡などについて話し合う。

〔母親面接 29〕 (3月2日)

2月28日、本人の意志を再度確認した上で復学する旨学校へ返事した。球郎はこのところ非常に口答えが多くなり、言葉遣いも悪くなってきた。

〔母親面接 30〕 (3月9日)

先日少年野球のコーチであった知人が球郎のことを心配して訪ねてきた。その際、母親が「少年野球の時には、球郎の気持と監督、コーチの気持がずれたところで、大人のペースで行ってしまったのではないか」と話した。高校になってから、球郎は「俺は野球をやりたくなかった。中学の野球部も大人がやれと言ったんじゃないか」と母親に不満を述べたことがある。そのことを話したら、父親と知人は意外に思い反省したようである。2人にはショックだったと思うが、母親は良い機会だと考え思い切って話したのだという。少年野球の時、父親は、翌日に試合が控えていると、疲れるからと言って水泳や入浴を禁じるなど球郎に制限を加えていた。また、監督である父親は息子を犠牲にすることが多かった。都合によって球郎のポジションを変えたり、チームメイトの前で彼をバットで殴ったりした。

〔母親面接 31〕 (3月16日)

今日自分が出かけて来る時に、父親と祖母が喧嘩した。父親が、「球郎、猫帰って来たのか」と彼に尋ねた際に、祖母が脇から球郎に代って返事をした。それで、父親は「俺が球郎に聞いているのになぜ婆ちゃんが口を挟むのだ。親子の間の話に口を出すな!」と怒った。しかし、祖母もひかず言い争いになった。父親と祖母とがこれほどのやりとりをしたのは結婚以来初めてだという。

〔母親面接 32〕 (3月23日)

今週は球郎の動きが目まぐるしく、良く覚えていない位である。自分の方から友人宅へ出かけたり友人と映画を見に行ったりした。ステレオを欲しいと言い出し、本人はもう買って貰うつもりで置く場所を考えている。猫が外で喧嘩して帰り、傷口が化膿悪化して手が動かなくなったので、球郎は親身の世話をしている。猫を病院へ連れて行くことなどで、球郎はさかんに父の車に乗って動いている。球郎と父親とが食事をしながら話をしていることも結構あった。

父親と祖母との間はまだ険悪である。母親は祖母と父親との間に挟まって気分が良くないが、これをやり遂げなければ駄目だとも思っていると語る。母親は、家族内の変化についてしんどさと同時に喜びも感じている。

第6期 登校開始、家族関係の変容 (約3ヵ月間 母親面接33～母親面接42)

〔母親面接 33〕 (4月13日)

4月6日に面接の予定であったが、4月初めに母親がぎっくり腰で動けなくなり、本日面接となる。球郎は始業式から登校している。3月末に、球郎はそれまで使っていた部屋から自分の持ち物以外を全部出して「自分の部屋」をつくった。彼のステレオを買うということで、十何年ぶりに親子全員でデパートへ行き皆で外食した。祖母と父親の喧嘩はまだ続いているが、あのこと以来家族の動きが今までと完全に変わってきた。これまでは母親も祖母をたててきたが、今は父親をたてている。父親が食事する時は母親もなるべく一緒にするようになった。以前は仕事が忙しいということで一緒に食べないことが多かったが、今はなるべく家族揃って食事するようにしている。自分もだんだん“おふくろ”になれてきたと思うし、家族にもゆとりが出来たように感じる。この1年間苦しかったが、それが自分たちに与えられた大きな財産だ。球郎がこうなったことでそれが与えられたのだと思う。

この後治療者は祖母が感じているであろう寂しさ、ショックなどに言及し、祖母へのサポートの必要性について話す。母親もそのことは理解しており、祖母に心遣いをしている面もうかがえた。

〔母親面接 34〕 (4月20日) ～ 〔母親面接 42〕 (6月23日)

球郎はその後も休むことなく登校。「俺は野球をやりたくなかったんだ」と言って、復学後も野球部には入らなかった。5月に入ると、球郎は家で口煩くなり、父親がいる前でも怒りを表わしたり父親に文句を言ったりもする。

父親は球郎が登校するようになってからは夜飲みに出たりせず家になる。妹が父親に逆らった際父親にしては珍しく叩いたりする。もっとも、娘の方も負けていず「くそ爺い！」と応酬したという。父親のあり方や家族の雰囲気に変化してきていることが感じられた。しかし、祖母と父親の関係は膠着状態にあった。

第39回面接で、母親は球郎が学校を休んでいる時副担任の訪問には抵抗がなかったが、担任の訪問を好まなかった理由としてつぎのようなことを語る。野球部で、A君はすぐにレギュラーになったが、球郎はなれなかった。試験でのA君の成績が球郎より上位であったので、彼は監督が学業成績でレギュラーを決めるといって愚痴り、そのことにすごくこだわっていた。中学まではいつもヒーローであった球郎が初めて野球と勉強での競い合いをし、それに負けた経験ではなかったかと思う。そのことが大きかったのではないかと言う。

第41回面接で、治療者は母親面接の間隔を空けることを提案し、母親の考えを聞く。母親は、球郎のことは良いが、父親と祖母の関係がまだ心配であると言う。結局、隔週で面接することで同意を得る。この回、父親と面談したい旨伝言を頼む。しかし、第42回に来談した母親の返事では、父親は面接について消極的であるという。

第7期 終結に向けて。父親への援助 (2ヵ月間 父親面接3～父親面接6 母親面接43, 44)

〔父親面接 3〕(6月29日)～〔父親面接 4〕(7月8日)

治療者が父親に電話して面談したいと働きかけると、初めは消極的な態度であったが、「時間帯によっては行きます」と承知する。父親は、これまで面接に対して消極的であったことについて、「球郎のことを聞かれても自分はあまり話すことがないし、家内の方が子どものこと知っているので、自分が来てもしょうがないと思っていた」と語る。この回、タイミングをとらえて、治療者が気がかりなこととして父親と祖母のぎくしゃくした関係のことに触れると、父親もそれを認める。祖母とのことについてはよく語る。父親の心情について治療者が推測していたことを伝え気持の明確化をすると、大いに肯定する。祖母がかかわってくるのが煩わしくて突き放したい感じがある。祖母に優しくすると、また以前の関係に戻ってしまいそうな不安があって厳しくしてしまうという。父親は、自分の気持を治療者に理解されたと感じたようで、次回の面接にも来たいと言う。第4回面接でも、祖母の人柄とそれへの不満などを語る。祖母は相手の話を素直に聞く人ではないから言っても駄目だという気持が強い。今は祖母の言うことはすべて駄目という感じで突き放している。自分でも今やっていることが良いとは思わないが、今はこうしかないと思うと語る。

〔母親面接 43〕(7月13日)～〔母親面接 44〕(8月10日)

父親が全く自発的に家族に黙って面接に出かけて行くので珍しいことだと思った。球郎の方は毎日元気で通学しており、母親としては気がかりな点はないと言う。第44回面接では、父親がこ

の頃変わってきて、自分から隣家の人に話しかけたり隣家へ遊びに行ったりすると言う。以前にはあまりなかったことなので母親は驚いていると。この回、母親面接の終結について合意を得たので、母親の努力をねぎらって終結とした。

〔父親面接 5〕(8月12日)～〔父親面接 6〕(9月3日)

第5回面接でも、父親は話し合いに対して意欲的であった。今祖母は毎年恒例の湯治で青森へ行っているの、祖母との関係は進展していない。まだ解決の糸口がないと言って苦笑する。しかし、湯治に同行している自分の叔母にはこれまでの経緯を話したことがあるので、湯治旅行中に叔母が話してくれて何か展開があるかもしれないと思っていると言う。第6回では、祖母とのことはそれほど変化ないと語るが、父親の態度に軟化の兆しも感じられた。面接の継続については、「球郎のことでなら来るが、婆さんのことでは必要ないと思う。親子だから時間と共になんとかかなると思う」と述べる。そこで、父親面接を一応終結することにした。

#### フォローアップ

球郎はその後も順調に登校。翌春2年生に進級し、以後も元気に通学している。しかし、父親と祖母の円満な関係が回復するまでにはかなりの時間が必要であった。真に安定した新たな関係が築かれたのは、父親が初めて祖母と衝突した時からほぼ1年後であった。その間、治療者は、父親面接終結から3ヵ月後の12月と翌年4月との2回父母と話し合いをする機会をもった。終結から3ヵ月の時点では、2人の関係にあまり変化はなかった。祖母に対する父親の腹立ち、不満はその後もおさまらず、祖母も意地をはり続けていた。そして、11月下旬に祖母は糖尿病、胃腸障害などで入院した。祖母の入院を契機に、問題が父親のきょうだいの知るところとなった。祖母と父親とがもめること自体が親戚の者には信じられないことであったので、母親に非難が向けられることにもなった。遂に、翌年2月中旬に父親のきょうだいが集まり話し合いがもたれた。父親はそれまできょうだいに対して祖母の悪口を全く言ったことがなかったが、親族会議で初めて祖母に対する不満をおちまけたという。結局、彼の弟が祖母に彼の不満を伝え仲介するということが事態の收拾がついた。2月末に祖母が退院して家に戻った。4月の面接時には、父親は祖母の心情を理解出来るようになり、以前のような頑な態度は消失していた。祖母も最近変わって余分な口出しをしなくなり、週に一度近所の老人と宗教団体R会の集まりに出かけたりしているという。父親は「最近、婆さんが何をやろうと気にならなくなった。婆さんは婆さん、私は私という感じで、私も落ち着いてきた」と述べる。母親も「大きな犠牲を払ったけれど、今は私も本当に楽になりました」と嬉しそうに語っていた。

## IV 考 察

### 1. 不登校発生の背景

田中(1981)<sup>11)</sup>は登校拒否の病理の本質的条件として人生早期の母子関係の希薄さに着目し、



登校拒否が基本的には二者（母・子）関係、三者（父・母・子）関係の固着により、つぎの集団適応につまづきを生じる対人関係の障害の病理であると論じている。この見解は、本事例については妥当と言えよう。乳幼児期において、球郎は母親に甘え、世話されるという自我の発達にとって大切な経験を充分もつことが出来なかった。当時、母親は家業の忙しさに追われ、家庭内の人間関係に心を奪われて余裕がなく、子どもの養育に十分なエネルギーを注ぐことが困難であった。また、そうした家庭事情ゆえに、子どもたちが早く手がかからなくなるようにと思い、小さい頃から厳しく干渉過多に育てた。その上、姉の世話に手がかかったこともあって、母親と球郎のスキンシップが一層不足することになった。さらに、球郎と父親との接触も幼児期から希薄であった。父親自身子どもと情緒的なかわりをもつことが下手で、子どものことは母親に委せる傾向が強かった。そうした父親との関係は、彼が母親との間で充足出来なかったものを補う力をもたなかったものと思われる。また、球郎が男性性や社会性を育む上でのモデル、導き手としての役割を果たすことも少なかったであろう。こうして、彼は、反抗期を経験せず、年齢相応の主体性、自立性を育まないで幼児期を経過することになった。また、性格的にも神経質、強迫的な完全主義、引込み思案、抑制が強く自己主張に乏しいなど、その後の社会適応においてつまづきを生じ易い素地を抱えていた。

小学生になると、野球を通して父親との接触が増えるが、それは監督と選手の関係においてであり、父・息子の関係が深まったのではなかった。しかも、父親は余所の子を叱ることが出来ないで、代りに自分の子を叱るなど球郎に犠牲、我慢を強いることが少なくなかった。

球郎は体格に恵まれており、運動も得意な方で、少年野球や中学の野球部ではいつも中心選手であった。学業成績の面でも常に上位を占めていた。これらのことは、前述のような問題性を孕んだ彼の自我を支える大きな拠り所となっていたにちがいない。殊に、花形選手である彼に対して向けられる家族、教師、仲間などからの関心、称讃は彼の自尊感情を支え、愛情欲求を満たす上で役立っていたのであろう。野球が上手であることは父親の愛情を得る通路になっていたとも考えられる。

小学校から中学校にかけての一見順調な適応も一歩踏み込んで見てみると、決して安定したものではなかった。交友関係は狭くほとんど野球の仲間に限られていた。友だちと遊ぶにしても、自分の方から積極的に誘いかけることはなかった。また、テストや絵、工作の時間に長い間考えていてなかなか取りかかれななど強迫的な構えの強さ、不自由なあり方が随所に認められた。

球郎が入学した時、P高校は開校してから2年目に入ったばかりであった。教師は入学者のレベルが初年度に比べて大きく上昇したことを生徒たちに話し激励したが、彼は逆にそれによって学業適応への不安や身構えを強めることになった。入学直後彼は母親に「1年早く入っていたら良かった。勉強が大変だ」と訴え、野球もやらないつもりでいた。ところが、担任に誘われ、結局野球部に入ることになったのであった。

野球部でのレギュラー争いに敗れたことは二重の意味で彼に衝撃を与えたと思われる。監督(担任教師)が学業成績によってレギュラーを決めていると思ひ込んだ球郎は(そのような受け取り方自体にも、それまで競争関係を経験することなく常にヒーローであった彼が野球の実力で負けたとは思いたくない気持と学業への不安が投影されているように思われる)、競争に敗れて、野球に関して抱いていた高い自己像の崩壊を経験し、また勉強への不安を一層強めたのであろう。野球と勉強を大きな拠り所、支えとしてきた自我は、そこでのつまづきによって根底から揺がされ自信を失う。このような衝撃的な経験が思春期という自我発達上難しい時期に生じたことにより挫折することになったと考えられる。

## 2. 親面接の過程と治療者のかかわりかた

子どもの突然の不登校は親に強い不安、混乱をひき起こすのが常である。本事例においても、当初父母は息子の不登校の原因を理解出来ず、不安、苦悩が大きく、なんとか登校させようと焦るのみであった。治療者は、そのように危機に当面し動揺する父母を支え、彼らが危機に対処する力を育んでいくのを援助すべくかかわっていった。

ここで、親面接(父母カウンセリング)の進め方、治療者のあり方について簡単に触れておく。親面接では、通常のカウンセリングと同じように、父母が経験している不安、焦り、罪責感などさまざまな感情を共感的に受けとめ話し合っていく。また、かりに親の養育態度に問題が認められたとしても、安易に親を批判したり非難したりすることはしない。実際、そうした批判、非難をすることによって父母の態度や考え方を換えようとしても効果がないことが多いし、むしろ治療関係の維持にとっては有害である。それよりも、子どもが問題(症状)を克服し立ち直っていくためには、親、家族がどうしたら良いのかを一緒に考えていこうという態度で接していくのである。親面接では、親の人格の変化を狙うよりも子どもとの関係の改善、子どもの成長を促進する心理的環境を整えることにポイントを置いている。それゆえ、父母が子どもの問題や心的現実を理解出来るように説明、助言をしたり、具体的にどう対処したら良いのかを指導したりすることも適宜行う。

こうした面接の進め方は、子どもの治療と併行して(多くの場合、子どもの治療担当者とは別の治療者によって)行われる父母面接や母親カウンセリングに関して諸家<sup>6)7)8)</sup>が論じているところに従うものである。ただし、筆者の臨床活動の現状は、共同治療者が得られないため父母、子どもを筆者が一手に引き受ける形にならざるを得ない。そのため、それぞれ別個の治療者によって面接が行われる場合に比べると、治療者の中立性を保つことに困難さを伴い易い。今のところ、筆者は上記の困難を少なくするために、逆転移の認識、検討に努めるほかに、つぎのことを指針にして親面接を行っている。それは、例えば本例のように母親面接、父親面接、父母同席面接を行う場合、上位目標として家族システムの中の「父母」というサブシステムを強化することを常に念頭に置き、父母それぞれの歩みを尊重しつつ、家族力動の動きに目を向けながら、各面

接をアレンジしていくことである。

本事例の親面接の経過に入ろう。インテーク面接において、父親はあまり語らず、母親に依存したあり方が顕著であった。治療者はなるべく父親の考えや感じ方をも聞くように努めた。この時点での治療者の見立て、理解を話し、登校刺激を控えるように伝えたが、それらは焦る父親の耳にはほとんど残らなかったようである。本人が来談しないので、とりあえず母親面接を中心にやっていくことにした。しかし、父親が登校させようと躍起になり不安と焦りからつぎつぎと行動を起こすので、父親をサポートする働きかけも必要となった。なお、治療者は初期のうち学校側と連絡をとり待つことの必要性を伝えていたが、残念ながら十分な理解を得るまでに時間を要した。

第2期に入る頃、父母は漸く息子が怠けているのではないことを納得するに至る。母親はある程度落ち着きを取り戻し、治療者への信頼感も生まれて、一緒に球郎の問題について考え始める。母親はなかなか感受性の鋭い人で、治療者と話し合う中から息子に対する理解を広げていく。また、それまでの自分の養育の仕方に目を向け反省もしている。母親の球郎の問題についての理解の深まりと落ち着きは、彼に、心理的な支え、保護を与える上で大きかったと思われる。父親は球郎を無理矢理に登校させようとはしなくなるが、息子のことについて投げやりなことを口にし、母親が面接に通うことに対しても悲観的な態度であった。しかし、母親の方は面接への動機づけが強まり、「ママの気持が楽になるし、ママの勉強のために行くんだ」と球郎に話したりもしている。

第3期には、休学したことにより覚悟が出来た面もあって、母親に球郎の動きをじっくり見守る姿勢が出てくる。親としての自信を取り戻した感じでもある。この時期に、球郎は徐々に退行し行動の変化が生じてくる。治療者はそれらの行動の意味について話し合い、母親もそうしたことが球郎の成長にとってポジティブな意味をもつものとして受けとめるようになっていく。この頃、父親も息子のことについてあからさまに愚痴ったりはしなくなる。

さらに、第4期に入ると、母親の洞察が一層深くなり、高まってきた息子の甘え欲求に応えるべく努力している。また、家族の協力が深く感謝し、自分の生い立ちや過去のことを肯定的に受けとめるようになる。他方、自分がこれまで夫の分まで頑張ってきたあり方を改めて見直し、自分が真に望んでいたことを口にするようにもなっている。そうした母親の内面の変化は、その頃生じていた球郎や父親の変化と相互に微妙に作用し合いながら展開してきたものと考えられる。治療者は母親の気づきの深さと家族の変化に感動させられることが多かった。この辺りでの治療者のあり方は、家族がもつ成長力を信頼してその歩みを見守り、それに従ってついて行く感じであった。しかし、年が明けて休学期間も少なくなってきたので、3月に向けての準備をしておく必要を感じ、そのことについて母親に助言をしている。また、その過程への父親の関与を促すべく、しぶる父親に面談を呼びかけ話し合っている。

しかし、第5期では、父母が学校との接触や息子との話し合いなどをためらっているうちに担任から他校受験についての意向打診がある。母親は動揺し父親も逃げ腰となる。治療者は、母親の動揺を受けとめるとともに、この問題は避けることが出来ないのだと父性機能を発揮してかかわっていく。母親は治療者に支えられ、促されて現実と直面し球郎と話し合う。そして、父母の心配をよそに、球郎はあっさりと復学の意志を表明する。ここで治療者に要請された父性は、この家庭において常に欠けていたものであったと思われる。この直後に、それまでほとんど家の外に出なかった球郎の愛猫が縄張り争いで他の猫と喧嘩をする。対決のテーマを感じさせるこれらの出来事の同時的な生起は、Jungの言う「共時性(Synchronicity)」<sup>4)5)</sup>を思わせ興味深い。共時性とは、同じ意味を持つと思える内的、外的の2つの出来事がほとんど同時に起こるのを説明するためにJungが用いた概念である。治療的展開が起こり大きな変化が生じていく過程で、これらの出来事がこの家族のまわりに布置(constellate)されたものと筆者は考えている。

父親と祖母の対決を契機にして家族関係が目ざましく変わっていく段階では、治療者は祖母をサポートすることに留意した。祖母は息子の変容に衝撃を受け、まともな家族の中で孤独感を深めていた。母親は祖母を支えることの必要性を理解してはいたが、母親が祖母にかかわることに父親が反対し、祖母も頑なになっているためもあって、これは必ずしもうまくいかなかった。なお、この時期になると、母親は球郎が登校拒否になったことによって新しい家族のあり方が得られたのだというふうを考え、息子の登校拒否を積極的に評価するまでになっている。

第7期以降においては、治療者は祖母のサポート、父親の祖母からの自立の援助、2人の関係の改善に目標を置き父親面接を重ねた。また、終結後もフォローアップを怠らなかった。父親の祖母に対する不満、怒りは激しく、また初めて自分の母に逆らう気負いや不安も感じられた。祖母に優しくすると元の関係が復活し自分が退行してしまうような不安を抱いているようでもあった。そうした複雑な感情の交錯が祖母への頑なな態度を続けさせているように思われた。治療者も過去に内的体験としては類似のものを経験したことがあるので、父親の心境はよく理解出来た。また、祖母の嘆き、苦しみにも共感出来た。父親、祖母、家族それぞれが新しい生き方、あり方を模索して苦闘した時期であった。

### 3. 球郎の自我の成長過程

球郎はどのような過程を経て立ち直っていったのであろうか。以下に彼の成長の歩みをたどってみよう。

学校を休み始めてから第1期までは、彼は強い苦悶、葛藤の中にあっただ。ふさぎ込み、不眠を訴え、食事もあり取らず床の中にいることが多かった。父母や教師からの登校刺激を受け、行かなければという気持と行けない気持との板ばさみの中で苦悶し、罪悪感、焦燥感を強めていた。自室にひきこもり家族との接触を避けるようにもなっていた。

7月下旬から夏休みに入り、登校をめぐる葛藤はある程度緩和される。これと共に生活パ

ターンは普通に帰り大分元気を取り戻す。第3期に入り、休学手続をすることによって、球郎は登校をめぐる葛藤から解放される。「内閉」(山中 1978)<sup>13)</sup>を保障する条件が本格的にととのった訳である。内閉は、自我の新生のために必要な言わば「蛹の時期」であり、そこでは退行して内面での自己探求と統合が行われるという治療的意義をもっている。この時期、球郎は外的行動ではバットの素振りなどで身体を動かしたりするが、内的には退行していく。そして、以前には見られなかった行動を示し始める。几帳面であった彼が逆にルーズになり、母親の言うことにも少し逆らうようになる。地味な色の洋服しか好まない彼であったのに、赤いトレーナーを希望したりもする。また、睡眠中の口吸いが再燃し、口唇欲求の高まりが推測されたが、これは夜食を欲しがったり祖母のつくる食事に不満を言ったりする形でも現われてくる。

第4期には、上述の動きがさらに強まり、母親が言う「たがが外れた状態」となる。母親が食事をつくらないことについて不満を言い、食物に関しての欲求を母親に強く向けるようになる。母親もそれを彼の甘え欲求の表現として受けとめ、それを満たすように努力する。母親とのそうした交流の中で、彼は幼児期に充分得られなかった甘え世話をされる体験をするのである。その後、球郎は母親、祖母、姉妹との間ではだんだん自己主張的になり、自分で身の回りのことをするなど自発的な動きが増えていく。母親に「今度友達をつくる時は不良の友達をつくるんだ」と語るなど、厳しかった彼の超自我が緩和、改変されつつあることも窺われた。

第5期に入ると、4月から復学する意志を明らかにした球郎は、これを境に食べ物の要求をしなくなる。以前よりも言葉遣いが荒くなり、自己主張はさらに強くなる。そして、3月末、彼は「自分の部屋」をつくる。これは、まさに自分だけの空間、自分の世界を獲得したのであり、自己確立を象徴するような行為であると思われた。

復学後、球郎は自分の意志で野球から離れる。また、父親に対しても自己主張をしたり反抗したりするようにも変わっていき、自我の自立性が一層強化されたことが感じとれる。

以上のように、球郎は幼児期に充分得られなかった母性を再体験し、それに支えられて自我を成長させ、思春期の発達課題である親離れと自立の方向に確実に歩み出したのである。また、学校や仲間集団においても積極的に安定した適応をすることも可能になったのである。

#### 4. 不登校を契機に生じた家族力動の変化

球郎の不登校が生じるまでの家族構造、役割関係にはつぎのような特徴が認められる。

父親は祖母との結びつきが極めて強く、祖母から精神的に離脱出来ていない。これには、少年期の頃から彼の父親が病床にあり接触が少なかったことも関係しているものと思われる。おそらく、そのために彼は男性性、父親性を育む上でのモデルを得られず、また母から自立することが出来ないままきたのであろう。父親は、祖母の求めには何を置いても応え祖母に対して逆らうことのない良い息子であった。祖母が夫婦のこと、子どものことに口を出しても黙認していた。また、父親は家庭における男仕事のことや子どもの養育に関することには実質的にかかわること

がなかった。対外的なことについても妻に頼り委せており、客からの苦情への対応や銀行とのやりとりなどには母親が専ら当たっていた。その依存の度合は強く、彼自身の父親の葬儀や法事における挨拶についても、妻が代ってしなければならぬほどであった。

結婚以来の諸々の経験の中で、母親は本来父親が担うべき役割を必要に迫られて果さざるを得なくなり、頑張ってそれを勤めてきた。元々、彼女は幼くして実母と別れて複雑な家庭の中で甘えを抑圧して頑張る人生を歩んできた人であった。そして、祖母も生活上の問題解決や危機への対処については母親の力を頼りにしてやってきたのであった。その代り、祖母が台所仕事を一切やるという役割分担にもなっていた。しかし、そうした役割関係の下に母親が頑張ることが、父親を一層依存させることになり、母親自身も母性を発揮することが出来にくくなっていったと思われる。父親にとっては男性性、父性を鍛えにくく、母親にとっては母性、女性性を育みにくいような布置が家族の中に出来上がっていたと言えよう。

こうした役割関係、均衡の上に形成されていた家族の同一性<sup>1)</sup>、安定性は球郎の不登校によって揺らぎ始める。球郎が学校へ行かなくなったことで父母、家族はそれぞれ心を痛める。家族成員の関心、エネルギーが集中的に球郎に向けられるようになり、彼の問題をめぐってそれまでとは違った動きが家族の間に生じてくる。

母親はそれまでの自分の養育の仕方などについて反省し始め、他方息子の問題との関連で家族関係、父母の役割関係、父親のあり方などにも目を向けていく。そして、母親と祖母の間で、これまでのように父親の代弁や口出しをすることは控えてなるべく見守っていようと話し合ったりしている。父親は初めのうちは息子を登校させようと躍起になるが、やがて表面的には投げやりな態度となる。しかし、内面的には苦悩から解放されることはなかったであろう。父親にとって球郎の不登校は、母親や祖母が言うように、彼が自分自身でとことん困った初めての経験であったと思われる。

球郎が徐々に退行して行動の変化をみせ甘えを表現するようになると、彼は祖母の料理や味つけに不平を言い始める。さらに、母親が食事をつくらぬことへの不満を訴え、具体的に母親に要求するようになる。母親も努めてそれに応える。この家庭におけるそれまでの役割関係に揺さぶりがかかり、母親の役割構造に変化を生ぜしめる。球郎のそうした変化は、母親の母性を喚起しそれを育む機会を与えたとも言える。そして、興味深いことに、球郎の変化に呼応するかのようになり、それまで家庭内の仕事に手を出さなかった父親が家の中の修理をするという象徴的とも思える行動を示す。その頃から父親は夜出歩くことが少なくなり、祖母に対して以前よりも自分の意見を言うようになる。これらの動きと関連して、母親は母性的な存在である“おふくろ”になりたいと述べ、また夫との間でよりかかれる関係が欲しいと感じていることも語る。

球郎が復学の意志表明をした後から家庭の中にさらに大きな変化の波が起ってくる。小さい頃から親に反抗したことがなかった父親が祖母とぶつかったのである。発端は、父親が球郎に話し

かけた時に祖母が横合から口を挟んだことであった。後に父親が語ったところによると、その時父親は「復学の意志を学校へ伝えた後で、息子が不安な気持と期待とが入りまじった状態で揺れ動いているのだらうと思って、気を遣って猫の話を紹介してかかわった。それが婆さんにはなぜ分からないのかと腹が立った」という。祖母に向けて発せられた「親子の間の話に口を出すな！」という言葉は、治療者には彼の父親宣言のように聞こえた。それは、彼が「母に忠実な息子」から真に「息子の父親」へと変容しつつあることを端的に示す言葉である。このような父親の動きが生じてきた基底には、親からの精神的離脱と自立という思春期の発達過程においてみられる「父への心的エネルギーの脱備給の過程」(Blos 1962)<sup>2)</sup>と類比的な心理過程が働いているように思われる。すなわち、息子の問題に悩みそちらに心的エネルギーが使われることによって、祖母に対して以前ほど強くエネルギーが向かなくなり(祖母へのエネルギーの脱備給)、そのことが祖母への反抗を可能にしたものと考えられる。この意味で、球郎の不登校は父親の祖母からの自立の動きを喚起したとも言えよう。

父親と祖母のぶつかり合いの後、家族は多くの変化を経験していく。祖母がつむじを曲げて食事をつくらなくなったので、母親が全面的に食事づくりに当たる。母親はそれまでの祖母をたてるあり方から父親をたてる方向に変わっていく。母親は努めて夫と一緒に食事をとるようになり、家族揃って食事をすることも増えてくる。父親も妻に対して心遣いを示すようになる。母親がぎっくり腰になった際、それまでにはなかったことであるが、病院への送り迎えをしたりして母親を驚かせる。父親は子どもとのかかわりの面でも変化を示す。父親らしい行動が増えてきて、子どもを叱るようにもなる。

しかし、すべてが肯定的に変化した訳ではない。突然の息子の離反と変貌、家族関係の変化は祖母に強い衝撃を与える。彼女は、息子との強い結びつきと家庭内での役割の喪失とを経験して、悲哀、不安、疎外感を感じ苦悩する。一方、外面的には強硬な態度をとる父親も内面では大きな危機を経験し苦慮していた。

そして、2人の関係の修復とそれを含めた新たな水準での家族の同一性と安定性を獲得するまでには1年近くの苦しい道程を歩まねばならなかった。この苦闘の過程をやりぬく中から、父親は祖母からの自立を達成し、祖母との安定した関係を新たに獲得する。また、親戚を巻き込んだ大きな試練においても、自己を主張し、対外的な問題処理の責任を自ら担うように変貌を遂げている。それと共に、母親も対外的なことを父親に委せて、念願であった“おふくろ”の座をしっかり手に入れることが出来たようである。祖母も苦しく辛い時期を脱け出して、新しい家族関係の中での自分の位置を見出し、食事づくりの一端を担う役割を再び果たすようになった。また、彼女は宗教関係の集まりに通い始めたりもする。家庭の外に出ることが極めて少なかった祖母であったが、その生き方に新しい次元が開かれつつあることが窺われる。

以上のように、球郎の不登校は家族力動に大きな変化をひき起こし、成員それぞれの発達課題

や未完了の仕事の達成を促し、家族の新生をもたらすことになった。換言すれば、彼の不登校は彼自身の心の危機を告げていると同時に家族関係、家族システムの中に存する問題を告げていたとも言えよう。まさに、Satirらの家族療法家が指摘するように、「症状行動は患者がその家族を救おうとする救助信号」なのである<sup>9)10)</sup>。

#### 参考文献

- 1) Ackerman, N.W. : Psychodynamics of the Family Life. (Basic Books, New York 1958) (小此木啓吾他訳「家族関係の理論と診断」1967, 「家族関係の病理と治療」1970 岩崎学術出版社 東京)
- 2) Blos, P. : On Adolescence—— A psychoanalytic Interpretation. (The Free Press, New York 1962) (野沢栄司訳「青年期の精神医学」誠信書房 東京 1971)
- 3) 石川元：家族絵画療法 海鳴社 東京 (1983)
- 4) 河合隼雄：ユング心理学入門 培風館 東京 (1967)
- 5) 河合隼雄：宗教と科学の接点 岩波書店 東京 (1986)
- 6) 浪花 博：問題をもつ子どもの母親のカウンセリングの諸問題 カウンセリングセンター研究紀要7 京都市教育委員会 (1974)
- 7) 小此木啓吾・片山登和子・滝口俊子・乾吉佑：児童・青春患者と家族とのかわり——とくに併行父母面接の経験から 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編「講座家族精神医学3 ライフサイクルと家族の病理」 弘文堂 東京 (1982)
- 8) 小此木啓吾・片山登和子・滝口俊子：父母カウンセリングと父母治療 加藤正明・藤縄昭・小此木啓吾編「講座家族精神医学4 家族の診断と治療・家族危機」 弘文堂 東京 (1982)
- 9) Satir, V. : Conjoint Family Therapy. (Palo Alto, Calif, Science and Behavior Books, 1960) (鈴木浩二訳「合同家族療法」 岩崎学術出版社 東京 1970)
- 10) 鈴木浩二：家族救助信号—— 家族システム論と家族療法 朝日出版社 東京 (1983)
- 11) 田中克江・村山正治：登校拒否の治療論の試み—— 「甘えなおし」療法の展開——九州大学教育学部紀要(教育心理学部門) Vol 26, No. 1, 109-118, (1981)
- 12) 若林慎一郎：登校拒否の現況と背景 臨床精神医学 12(7), 815-823, (1983)
- 13) 山中康裕：思春期内閉 Juvenile Seclusion —— 治療実践よりみた内閉神経症(いわゆる学校恐怖症)の精神病理 中井久夫・山中康裕編「思春期の精神病理と治療」 岩崎学術出版社 東京 (1978)

(昭和61年5月21日 受理)